

米欧亜回覧

第73号

発行

特定非営利活動法人

米欧亜回覧の会

編集委員会

新年会は一月五日(日)、新趣向で

「音楽でめぐる岩倉使節の旅」

二〇一四年の新年会は、これまでと違った趣向で、一部はサロン・コンサート、二部は飲食と歓談のニューイヤーズパーティで行うことになった。題して「音楽でめぐる岩倉使節の旅」、演奏は会員有志とそのご縁で招くプロ、セミプロの素晴らしいゲストミュージシャンを迎え、米国、英国、欧州とゆかりの音楽で旅をすることになる。

場所は、皇居を見渡す素敵な会場(通称「外国人記者クラブ」)



10月全体例会講演会 (学術総合センター)

の二十階)、魅力的な楽の音にのって新春を寿ごうという催しです。幕の内でもありご家族もまじえて賑やかに行いたいと思います。奮ってご参加ください。

秋の全体例会は、板谷敏彦氏の講演

「グローバルに展開する金融資本主義の跋扈」

第六十九回となる全体例会が、十月十三日(日)十三時から一ツ橋の学術総合センター中会議室でおこなわれた。

今年度になって会員増の傾向にあり、全体例会にも新会員四名が参加し、会務報告に続いて挨拶をおこない参加者の拍手を浴びた。

第二部は、金融・証券業の研究者である板谷敏彦氏の講演会を開催した。「金融資本の跋扈―二十一世紀になぜ金融システムは肥大化したのか―」をテーマとした興味深い講演で、終了時間まで質疑が続いた。

(詳細は二頁)

グローバルジャパン研究会、

ホットなテーマで白熱議論続く

九月は、塚本弘氏による「今、そこにある危機」というホットな問題意識で報告があり、中国の領海、領空や主権に対する挑戦につき熱く論議され、後半では憲法問題が俎上にのせられ、両論が拮抗して白熱した Debate が行われた。

十月には、泉三郎氏の大テーマ「日本をどんな国にしたいか」シリーズの三回目で、「家庭の再生」と「日本列島の美的改造論」が披露され、種々意見が出て大いに盛り上がった。

十一月には、外部講師の井上雅晴氏を招き、海外で発電所建設という大プロジェクトをつぎつぎと達成された貴重な経験を基に現下の日本の電力問題について素晴らしい講話をいただいた。

(詳細は三・四頁) 歴史部会も続々と「人物論」で充実

九月は外部講師、新進気鋭の東大準教授五百頭馨氏を招いて、「福地源一郎―セカンドベストの探求者―」論。

十月は吹田尚一氏の「加藤高明―その外交政策と政党政治の光芒―」論。

十一月は多田直彦氏の映像をまじえての「新島襄と岩倉使節団」と続いた。

(詳細は五頁)

国家の政策には短期と中長期のものがある。当面は現実の重点を置くとしても、中長期のものには基本的な理念というものがあつて、そこには理想があつてしかるべきだ。

安倍政権の施策はデフレ低迷経済に対する「富国策」と隣国「中韓の脅威」に対する「強兵策」と解釈できる。いわば「富国強兵」策である。

その先にあるヴィジョンは七年後のオリンピックくらいしか見えない。それは三週間足らず東京中心で行われる若者のスポーツの祭典であり、実態はそれを旗印にした大建設工事の経済効果を狙いとさえみえる。そこには理念らしきものもみえず中長期の目標もなく夢のあるヴィジョンも描かれていない。

「富国強兵」か、「美国福民」か

泉 三郎

明の国である。そしてこの百六十年間、いくたの試行錯誤と成功・失敗の末に、平和で繁栄した国を創り上げてきた。確かに、この二十年ばかりは迷走したが、その実績と知恵の蓄積は大きく、いったんそのことに気づき、その気概をもって二十一世紀の新しい国社会のモデルを提示する位置にあると思う。

私は日本人は今こそ大志を抱き大きな夢を持つべきだと思う。それは英米文明の後追いではなく、それを超える新しい文明の創造でなくてはならない。たとえば、二〇五〇年を目標にして「美味し国、福寿の列島を創る」という夢を抱いてはどうか。それには思想の軸をGNP偏重から、幸福度の重視へと大転換をすること

今、日本にとつての「大事」とは何か。それは二十年、三十年後を見据えて「日本を、世界をどのような姿にしていきたいか」という大ヴィジョンを描くことではないのか。

日本は、四季にめぐまれた青山緑水の列島である。そして中国二千五百年の文明と西洋二百五十年の近代文明を共に摂取してわがものとしてきた、世界でも稀な東西融合文化

が前提になる。その視点に立てば、「富国強兵」策はまさに時代錯誤であり、「美国福民」策こそが新時代の目標としてふさわしい、そして、グローバルな視点では宇宙船地球号が「争いや格差の舞台」ではなく、「平和と幸福の世界」であることを一途に目指すべきだと思うのだが、如何なるものであるうか。

第69回
全体例会

板谷敏彦氏の講演会開催
「金融資本の跋扈」―二十一世紀になぜ金融システムは肥大化したのか―

今年度の秋の全体例会は、十月十三日(日)十三時、一ツ橋の学術総合センター中会議室で開催された。

第一部は石垣碩信事務局長の司会進行のもと、泉三郎代表の挨拶および会務報告が行われた。

第二部の講演会に先立ち、司会進行が山田哲司氏に引き継がれた。まず、例会初参加の新会員四名が挨拶を行い、次いで、山田氏が講師にお迎えした板谷敏彦氏のプロフィールおよび著書の紹介・解説を行い、講演会に移った。



講師の板谷敏彦氏

て講演を行った。

板谷氏は、石川島播磨重工、日興証券を経て、みずほ証券株式会社本部営業統括に就任され、その多彩な海外での証券業務の経験をもとに、二〇〇六年に投資顧問会社ルー・アセット・マネージメント株式会社を設立、現在その代表取締役をされています。同社は、和製ヘッジファンドとして話題となった。また業務のかたわら、金融・証券業の研究を深め高橋是清の活躍を描いた「日露戦争、資金調達の戦い」や「金融の世界史」(いずれも新潮選書)の著作を発表、今や歴史家、著述家として活動を広げている。

講演は大別して二部に分かれ、前半は金融の歴史、後半は規制緩和の進展と金融技術の発達を背景とした跋扈する金融資本をテーマにおこなわれた。

講演要旨

金融の歴史は古く、ハムラビ法典(紀元前一七五〇年ごろ)には利子の規定があり、古代国家でも利子の概念は存在していた。また金銭貸借契

約もおこなわれていて粘土板の証書も見つかっている。貨幣の歴史を見ると、中国では紀元前八世紀には青銅製のコインが作られていた。その後、キリスト教世界では、商業と共に金融業も大きく発展し、一世紀には決済銀行が生まれ、金銀の預り証で決済する信用創造が始まる。ヨーロッパではアラビア数字や複式簿記をイスラムから取り入れ、ルネサンス期のイタリヤで金融業・保険業の基礎が築かれる。大航海時代にはオランダ、イギリスを中心に金融業はさらに発展し、ついで産業革命期において近代の通貨制度、金融市場、株式会社制度が整えられた。

第一次世界大戦、第二次世界大戦を経て、イギリスに代わりアメリカが世界の経済を支配するようになり、黄金の六十年代を迎えアメリカ経済はさらに拡大し、産業構造の変化(三次産業化)が進む。

一九七一年のニクソン・ショック以降、実体経済の不振は実物投資機会の相対的減少を招き、集積された資金は収益機会を失い資金の余剰時代に突入し、金融派生商品が発達し、金利という実体のないものの売買や、株価指数先物市場が始まる。その後も八十年代(レーガン大統領)の規制緩和、一九八五年のプラ

ザ合意による円高など世界経済は激動期を迎え、一九八七年十月のブラックマンデーは、一日で二十二%と史上最大の株価下落を生み、株式の流動性のリスクを再認識させることとなる。アメリカは二〇〇七年以降もサブプライム問題とリーマンショックを引き起こし、サブプライムでの民間債務三百七十五兆円は公的債務に転換されたのみで、未だ根本的解決には至っていない。金融の跋扈は続くが、世界の主要国が、各国とも財政の建て直しには依然として苦戦し、過剰な資金を供給しインフレ経済へ誘導しつつ、実体経済の建直しを図るなか、金融はその存在と機能の維持をアピールするために、どのような方向に舵を切るの

であろうか。

なお、この要約は小野氏のメモに負うところが大きいのですが、さらに詳しくは左記の著書を御覧下さい。

講演終了後、約四十分活発な質疑応答がおこなわれましたが、身近な問題がテーマであっただけにほぼ参会者全員から質問があり、大変充実した講演会となりました。会の終了後は神保町の焼肉店「翔山亭」において約十五名が参加して懇親会が開催され、さらに活発な議論が続けられました。板谷氏は、その前著

「日露戦争、資金調達の戦い」において、金融・証券の問題にとどまらず、歴史家としての視点・姿勢を明確にしておられますが、今後も引き続き金融・財政から見た昭和史(特に昭和前期)にも意欲を示されており、益々のご活躍が期待されます。

(文責) 山田 哲司
(写真) 中山 進

小林富士雄氏 惜しまれて退会

小林氏はわが国山林学会の重鎮(大日本山林学会の名誉会長)で、現役引退後もJICAを通じて世界各地の山林行政や教育に貢献された。当会でも岩倉使節団と山林問題について貴重な研究をされ、多くの示唆をあたえていたが、このところ高齢のため耳が遠くなったことを理由に退会の申し出があった。今後も当会のOBとして時にはお顔を出していただきたいものである。



12月の実記を読む会で退会の挨拶をする小林富士雄氏

☆新会員自己紹介☆

前号に続き、今年度になつて会員となった四人の方に自己紹介をお願いしました。

横内則之

元々、ビジネスマンですが歴史好きでしたので、定年を機に、明治から終戦までを辿る『学校で習わない日本の近代史』という本を書きました。その縁で有るクラブに参加したところ、その会員からこの会を紹介されて入れて頂くことになりました。明治の立役者たちが、世界をどのように見、それを近代国家建設にどう生かしたかを改めて知りたいと思うと共に、会活動を通じて、自分なりの歴史観、国家観、戦争観などを検証したいとの思いもあり、楽しみにしています。

大野啓子

千葉県佐倉市在住。高校までを愛媛県宇和島市。松山市で過ごしたのち上京。大学では法律を学び、銀行勤務を経て、専業主婦歴三十年です。趣味は家庭菜園。テニス。ハンドベル。小学生への絵本の読み聞かせ活動などです。所属しているコーラスサークルでピアノを務めてくださる、長男の学友ママでもある植木さんより当会を紹介いただき参加しました。まだ、例会参加は数少ない私ですが、出席の度に皆様より知的刺激

を受けて幸せにつつまれて帰宅しております。今後ともよろしく願います。

多田直彦

近藤義彦様のご紹介でこの会を知り、ここで歴史を学べるのでは？というのが入会の動機です。その後、「実記を讀む会」で泉三郎会長の朗読をお聞きし、明治の日本語の美しさと意味の深さを再認識しました。最近、私は同志社や新島襄の勉強をしています。岩倉使節団との接点がある色々あるよう新しい発見を期待しています。趣味は写真と海外旅行後に動画風のDVDを自作することです。よろしくお願ひ申し上げます。

赤間純一

初めまして。赤間純一(あかまじゅんいち)と申します。植木様のご紹介で当会を知り、その自由闊達な雰囲気魅せられ加入を決意致しました。

私は、三十年以上にわたって、練馬と中野の区境近辺で「小さな教室」を主宰しております。仕事の傍ら、「學門は歴史に極まる」という徂徠の言葉に崇敬の念を抱いておりまして、雑読を重ねて来た次第です。趣味は、オーディオと写真という「真性」のオタクですが、今後とも宜しくお願ひ申し上げます。

グローバルジャパン研究会報告

担当幹事 塚本 弘



hiroshi.tsukamoto@eu-japan.jp

■日本の安全保障と憲法問題

九月二十八日開催、参加者十四名。

担当の塚本弘が「日本の安全保障問題と憲法改正」について発表し、議論がなされた。

中国からの我が国の領土、領海、領空や主権に対する挑発は続いており、こうした状況は「今、そこにある危機」と認識すべき。特に、南シナ海では、比の米軍基地やロシアのベトナムのカムラン湾の海軍基地からの撤退後、すぐに中国がそれぞれの沖合に進出し、大きな問題になっていることからも明らかである。中国の習近平主席は、「平和的発展の道を歩むことを堅持する」といいながら、他方では、「我々の正当な権益を決して放棄しないし、中核的利益を決して犠牲にすることもない」「中華民族の偉大復興を実現する中国の夢を実現」ともいつており、どうも後者のほうが本音のように思われる。

土、領海、領空を守り抜くことが大事。また、アフガニスタンの国際治安部隊には、ドイツが四千三百名、カナダが二千八百名も派遣しており、さらにソマリア沖の海賊対策にも日本はじめ各国が艦艇を派遣しているなど、国際的な治安維持協力が重要となっている。

これまで、「現未来部会」で憲法九条の改正問題については、四回にわたり議論してきた。賛否両論あったが、現実の国際情勢の厳しさを考えると、日本としてもまず、集団的自衛権の行使について、現実的な対応を考え、さらに、憲法改正についても第九条第一項の「国権の発動としての戦争を放棄し、武力の行使による威嚇、及び武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては用いない」という部分が堅持すべきであるが、第二項については、改正することが望ましいとの説明。これに対し、「平和国家日本」こそ日本のあるべき方向であり、改正には反対など、活発な討論が行われた。

（文責）塚本弘

■潤いのある家庭と美しい個性豊かな列島へ

十月十八日開催、出席者十一名。今回は泉三郎が担当で、「潤いのある家庭・信頼でき

るコミュニケーションづくり」誤った個人主義からの脱出」と「日本列島を美しい個性豊かな列島へ変身させよう」についての報告し提言をおこないい、それぞれについて活発な議論がなされた。

前半は、「家庭とコミュニケーションの再生」について、「家庭は生命の泉」であり「幸福の源」であり「社会の基礎」であるという立場から、その重要性について再認識する必要があるとの考えを述べた。そして家庭とコミュニケーションが、生命の継承の場であり、三代の結節点であること、そして高齢者・祖父母のあらまほしき生き方についても触れた。

次いで「何故、現代の家庭は崩壊に瀕しているのか」について、エセ個人主義・エセ平等主義の跋扈、個族の群生、過剰な欲望主義と自己実現主義などがその原因だと分析、高齢者問題についても誤った死生観(人間は動物であることを忘れてはならない)が問題という指摘をした。そして、「家庭の再生」に向けて「意識の大改革」や「仕事と子育ての二刀流」、「人生三毛作」さらには「オリンピック的家族」などのアイデアについても述べた。

(四頁に続く)



井上雅晴氏 (11月19日)

また、後半では「個性豊かな列島」を目指し「道州制で日本を美的に変身させよう！」という視点から、大平正芳首相の「田園都市構想」や「美しい国土づくり大綱」(国土交通省・平成十五年)の紹介を行い、自然と人間の融和を特長とする日本の思想についても語った。

そして具体策として、景観条例の全国的な施行、各自治体に美術デザイナーや審美委員を置くことなども提案、電柱・電線の地下埋設化、看板を美的にすること、役所、学校、駅舎などの美化、橋、歩道橋、屋根、塀、垣根、建築、交通機関、街路樹や花を植えること、河川や道の緑化、形、色彩などに美的センスをプラスすることなどの提案をした。

そして、それを主導するパワーはこれから「志民・NPO」ではないかとの認識も示した。また、最後に「道州制」(仮に十二州案)の採用についても言及し、各州の具

体的イメージの参考資料も提示した。(文責) 泉三郎

■東日本大震災後の原子力問題と電気事業制度改革論(講師 井上雅晴氏)

十一月九日開催、参加者十五名。

三菱商事で、最初のIPP (Independent Power Plant) を立ち上げ成功され、米国の Power Awardを受賞、『電力改革論と真の国益』の著作をもつ井上雅晴氏に講演頂いた。

東日本大震災後の原発問題は、氏は、日本の電力は、石炭・石油・水力・原発のベストミックスがうまく行っている上に、コストもエネルギー資源輸入国としては世界で誇るべき低価で供給できているので、特に、CO2の排出も少なく、低価の原発は、将来の化石燃料の入手難を考慮すると、脱原発は非合理だと言

う。現在の軽水炉は、ウラン燃料の0.5%しか使われていないが、もんじゅの高速増殖炉(FBR)が、実現すれば、ウランの六十%が使え効率的で、その実現性も日本の技術をもってすれば、そう遠くない将来に期待できる。放射能問題は、マスコミの無知と過剰反応で、ネガティブに考えられているが、国立がんセンターの指針にあるように、現在の病院で使われている

「取りあえずCTスキャン」の被曝量より、許容基準値は低く抑えられており、人体への被害はほとんどなしと考えてもよい。また、被災後の処置は、外国からも評価されており、日本の放射能防御の技術水準は高い。電気事業制度は、一九五〇年松永安左衛門の敷いた路線が守られており、日本の電力安定供給は世界一の水準であり、発送電分離案は、安定供給を危うくする。現在の総括原価方式も維持すべきだ。

再生エネルギー問題は、各国が試行錯誤しているが、脱原発を唱えた、ドイツでもコスト高で、今見直しを迫られている。ともかく高コスト(従来の四分の五倍)を考えると、どう考えても非現実的で、供給が高まると、安定供給の面で問題が多い。もちろん、現在の九電力体制も、いくつかの問題がある。地方の王様になりすぎ、政府に顔を向けすぎている。ベスト・ミックスに原発の最終処理コストが入っていない。ナショナル・セキュリティ論がない等の指摘はあったが、全般的には、現体制への肯定論であった。

これに対し、参加者からは、脱原発は無理かもしれないが、不完全な科学は使うべきでないという倫理の問題は残り、安全性をどう考える

か、国民的議論と納得が必要だ。三、一後も電力は需給が均衡しているのは、節電意識や省エネ技術の向上があったのではないか。また、これ以上経済成長の持続と、今までのような過剰電力を今後も続ける意味があるのかとの疑問や燃料・蓄電池によるエネルギー供給の分散化の問題や、再生可能エネルギーへのシフトをコストだけで切り捨てるべきではないという疑問も呈された。

(文責) 小野 博正

歴史部会報

担当幹事 小野 博正



mi040031-9697@tba.t-com.ne.jp

■福地源一郎セカンド・ベストの探究者(講師) 五百旗頭馨氏(東大准教授)

九月二十七日開催、参加者は新人三名を加えて十八名、講師のご子息・五百旗頭アレン君も加わって、和やかな楽しい会になった。「福地桜痴(源一郎)の政論と文化活動」が副題である。桜痴とは、「吉原の芸妓・桜路に狂った男」との自虐とか。福澤諭吉とは天

下の双幅の「福」とし、自ら才能は自分が上、意志は福沢が上と評した。福地は一八四一年生れ。長崎で漢学を学び、長崎の医師・福地家に養

子に入り、蘭学・英学を学び幕臣に取り立てられる。文久遣欧使節団の日露交渉に参画、ロシアは怖いがある意味で公平だと、樺太分割案を幕府に提案するが受け入れられず。王政復古後、剣よりペンと、紅湖新聞を創刊し言論界に入り、新政府危険分子と投獄されるが、木戸孝允の引きで新政府官吏として、岩倉使節団に随行し、ヨーロッパの領事裁判調査でギリシャ、トルコ、エジプトを回り、エジプトの立会裁判所交渉に感銘。後に、エジプト・モデルの現実主義の立会裁判所を提唱する。征韓論政変・台湾出兵・琉球併合・対清交渉には批判的で、攘夷派再来と軍人政治を好まず、木戸孝允・井上馨などと危機感を同調して、東京日日新聞の主筆として、社説欄を創設し、新しい言論空間をつくるが、政府布告を掲載して、太政官御用新聞とも批判される。だが、福地は政府の旧慣破壊・急進的民権論も批判、極論の連鎖を防ぐための民意の限定的表出を説き、地方官会議、地方民会議、東京会議所、府会、東京商業会議所の創設や、上野の天皇臨幸などを演出する。何事も急進的に理想のベストを狙わず、不完全でも現実的な処置を追及し、『穏健な立憲主義と協調外交』で漸進主

義の社会戦略を信条とした。晩年の福地は岩倉使節団での西欧体験を生かし、演劇の改良、歌舞伎座の創建や脚本・史論・実業界、官界などをテーマのノンフィクションなど文化への裾野を広げる貢獻は忘れられない。福地が福澤と比して、それほど後世に名を成さなかったのは、御用新聞とされたこと、三人しか党員のいない立憲帝政党をつくったこと、反復常無き言動と先駆的だが折衷的と思われたことが原因か。彼は、ノブレス・オブリジエのない、江戸の文化まで否定した明治上流社会の下流化を批判し、自ら社会の下流に降りてきて、日本文化を底上げした人であり、なぜ、近代社会が滅びたかは、上下が二分化したことを挙げてている。

(文責) 小野博正

■加藤高明—その外交政策と政党政治の光芒(講師:吹田尚一氏)

十月二十一日開催、参加者十八名。現代、世界中の先進国で、政党政治が転換期を迎えているように見える。吹田氏は、戦前の日本で、政党政治が確立して円滑に機能していたら、戦争への道は回避できたかもしれないという。その鍵を握った人物が、大正期、憲政会(のちに、民政党)の基礎を築いた加藤高明

である。加藤は、万延元年に生まれ、大正十五年に大正天皇の崩御の直前に亡くなった。(享年六十七歳) 東京帝大卒。三菱汽船(後の日本郵船)へ入社。ロンドン支社詰。三菱本社副支配人となり、岩崎弥太郎の長女・春治と結婚。英国で知り合った陸奥宗光の引きで外交官に転身。大隈外相の秘書官を務め、一八九四年英国全権公使の時、日清戦争後の清国の弱体化と、列強の清国蹂躪を見て、「極東の危機」を感じて『極東論策』を建言する。英国と協調し、ロシアの南下を押さえ、朝鮮を支配下に置く。そして、日清戦争で獲得した「威海衛」を英国に譲渡して、その後の日英同盟の橋渡しをする。一九〇〇年の伊藤内閣から、西園寺内閣、桂内閣、大隈内閣の外相を四回歴任。日露戦争、欧州参戦(山東半島占拠)と対支二十一ヶ条要求で、終始タカ派外交官を貫く。二十一ヶ条問題では、元老、軍部の要求を取りまとめたもので、実質は最終十ヶ条であった。それでも①旅順・大連租借、満鉄・安泰線の経営権九十九年間②鉄道・鉱山権③満州での農業経営・商工業建設用地商租権④鉄鉱会社合併権(日露戦争、大東亜戦争の鉄供給)をがちりと勝ち取った。帝国主義

的外交、大国外交と言われるゆえんである。パクス・ブリタニカ全盛の英国外交に学び、日本の国益のためには、日英同盟をバネに、対ロシア強硬外交を貫き、外交には軍の容喙を許さない主義を堅持した。政治家としての加藤は、大正五年(一九一六)憲政会の総裁に押されながら、苦節十年を経て、やっと大正十三年に内閣総理大臣に就任する。政党は国家のために存在する。朝野を問わず、国運発展と国民の幸福のために尽くせと、在野党の品格と責任を語り、多数党の横暴と少数党の放縦を戒めた。加藤内閣では、①綱紀肅正、勤儉節約、財政緊縮②行財政の改革(陸海軍の軍縮)③普通選挙法の成立④元老の容喙を許さず(貴族院改革)⑤小作調停法を実現した。西園寺公望には「今にして思えば、木戸、大久保、伊藤、あるいは加藤高明、やや落ちるが原敬など、いずれもひとかどの人物であった」と言わしめ、戦後、ポツダム宣言による「日本の民主主義的傾向の復活強化」は、加藤内閣以来の憲政会、民政党の政治を目指しており、後に幣原内閣が追及・実現した労働組合法、農地改革、婦人参政権などはすべて加藤内閣路線の後追いの成果であった。(文責) 小野博正

■新島襄と岩倉使節団(講師:多田直彦氏)

十一月十八日開催、参加十五名。

講師の多田氏は、同志社フアンを増やす会で、会紙のレポート発信をされておられる方。『大河ドラマ「八重の桜」』で、八重の伴侶として「時の人」でもある新島襄の生涯を、その生涯に出会った人々の映像をふんだんに交えて紹介された。江戸神田の安中藩邸生まれ。父新島民治は、藩の祐筆、書道塾も開く。襄も、習字、絵、礼儀作法、馬術、蘭学を学び、藩主の日誌・記録係に十七歳で任命されるが、蘭学の傍ら、密かにキリスト教に関する中国の書物を読む。出仕より勉強に熱心で、軍艦操練所で航海術、英語、数学、西洋砲術を学ぶ。備中松山藩が購入した快風丸に乗ったことが彼の人生を変える。

彼は、快風丸の箱館航海の機会を捉え、計画的に藩主の許可も得て、修業名目で便乗し、箱館五十五日滞在中に、米国密航を企て、塩田虎尾、菅沼精一郎(武田斐三郎塾の塾頭)、ニコライ、沢辺数馬、福士卯之吉、セイヴォーリー船長(脱国のベルリン号)、ポーター(ポーター商会会長)等の献身的協力を得て、脱国に成功する。思い

は、キリスト教を知りたい。アメリカを知りたいであった。渡航したアメリカでは、ニューイングランドの良質のキリスト教徒等に出会い、岩倉使節団と出会う九年間に、全人教育、キリスト教、デモクラシーが西洋文明の根底にあると知り、祖国にキリスト教主義大学(今も、同志社大学は、入信は問わず、理解者を育てる)をつくり、自治自立の人民を育成する夢を描く。アメリカでは、セイヴォーリー船長、テイラー船長(上海・ボストン間のワイルド・ローヴァー号船長)、ハーディー(襄の米国滞在のスポンサー)、ミス・ヒドウン(家族として下宿の主)、フリント牧師、テイラー校長、シーリー教授などの親交を得る。森有礼の配慮で、留学生の免状を得て、岩倉使節団の一員に加えられる、木戸孝允の肝いりで、田中不二麿と欧米の教育事情を調査し、「理事功程」に記録・報告された。キリスト教への興味に始まり、それを媒体として、文明開化期の人民を育成するという男の信念が、生涯を通じて不思議な人と人の連なりを生み、次第に実現していく過程で、八重や山本覚馬や榎村・北垣京都知事等も登場し、彼の夢に貢献する。(文責) 小野博正

実記を読む会報告

担当幹事 小坂田 國雄

Tel&Fax 044-987-1531

osakadakunio5256@jcom.home.ne.jp



第175回実記を読む会

ツにやってきました。そして五十八章の終わりで、かのビスマルクから国内的には「鉄血政策」を、国際的には「弱肉強食のリアリズム」を教えられたのである。その後の日本が辿った道のりを考える時、これこそ日本百年の決定的瞬間ともいえるのではないだろうか。当然、回覧実記のハイライトでもある。

そこで ①日本の進路を決めたビスマルクとはどんな男だったのか ②世界列強の消滅

長、一八七〇から二〇一〇まで(芳野版「大國の興亡」) ③ドイツと日本、大成功は大失敗のもと(三連勝のあと夜郎自大となり大ズッコケ)、をまとめ、この百年を鳥瞰してみた。また、以前にまとめ、発表した「ザビエルから漱石まで、西洋との出会い」のリストのなかから、ドイツ↓日本の代表選手として、ケンペル、シーボルト、シュリーマン、ベルツを、日本↓ドイツの代表として、市川清流(文久二年の遣欧使節)、福沢諭吉(国尽くし)、木戸孝允(日記)、青木周蔵(自伝と水沢周さんの著!)、近くは永田鉄山(統制派、総力戦)、東郷茂徳(悲劇の戦犯)を取り上げ、当時の日本とドイツのリアルな状況を理解しようとした。

■第百七十六回

十月十日開催、第五十九〜六十章「ベルリン市の記」中、下、ポツダム

ネット上の百科事典 Wikipedia)において、「岩倉使節団」を検索してみると、概要の欄に主要訪問国のリストが表示される。その中で、ドイツ語の Wikipedia)へのリンクをたどると、ドイツにおける使節団、とくにベルリン訪問に関する詳細な情報が掲載されている。Googleの翻訳機能

①大久保副使 ②ケーニスベルク市へ ③アイトクローネン駅 (ドイツの最後の駅) (文責) 高橋 三雄

①貝珠宮(ノイエ・パレス) ②オレンジ宮 ③サン・スーシ宮(無憂宮) ④展望台(ブフィングスベルク) ⑤マルモール宮(マーブル・パレス) ⑥バベルスベルク ⑦ポツダム城 [3月28日]

■第百七十五回 九月十二日開催、出席者十二名。担当、芳野健二氏。 一行は、日本の将来の「くのかたち」を求めて、アメリカ、イギリス、フランスと巡ったのち、遂に建

利用することによって、ドイツ語のページも日本語で参照できるので、今回の報告では、使節団が訪れたさまざまな場所や施設について、可能な範囲で参照することにした。

①兵器庫 ②モンビジュール城 ③ソルトマン社のソーダ水製造工場 ④王立印刷所 ⑤天文台 ⑥フランツ兵営 ⑦騎兵の兵営(ベル・アリアンス街) ⑧一八一四年以降のプロイセン軍 ⑨電信局 ⑩造幣局 ⑪ベルリン監獄 ⑫国立の小学校(生徒数千名) ⑬フリードツヒ・ウイルヘルム大学(現在のフンボルト大学) ⑭消防署 ⑮ベルリン市庁 ⑯漁業会社主催の展覧会 「ポツダム市」

米邦武の名語録:朗読と寸評」でした。久しぶりに泉さんの朗読で久米の格調高い漢文調の名文に触れ、また、興味深い解説と寸評によって、改めて視点の面白さや『実記』の魅力を感じた。

「米国編」で最も興味を惹いたのは、久米が「是ニテ奇怪ナラスンハ何ヲ以ツテ奇怪トセン」といったキリスト教に関するもので、教義を「癡癡ノ戯言」と切つて捨てた久米の言葉を、泉さんは理解が浅薄だったとしながらも自らも若い頃は久米と同じ感想をもったと語った。キリスト教に根ざす価値観、文化、生活習慣は、仏教・儒教の世界観とは大きな違いがあり、私も日本人なら戸惑うのも無理はなかっただろうと思った。

英訳実記を読む会報告

担当幹事 岩崎洋三

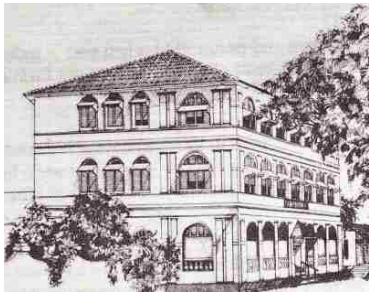
Tel & Fax 03-3488-0532

iwasakiy1116@gmail.com



しい会となった。(橋本 吉信記) ■第百十六回 九月十八日開催。Ch. 95 A Record of the Voyage through the Red Sea (一)の章では、先ずポートサイドからスエズにいたる約百六十キロのスエズ運河についてその完成までの経緯をかなり詳細に記述している。完成は、一八六九年で、使節団の通航は約四年程経った時点である。運河及び紅海を航行中に目に入ってくる風景はヨーロッパのそれと異なり、砂漠や、乾燥し赤茶けた大地等、久米にとつて珍しいもので、そのような記述がみられる。一方、訪れたことのないエジプトについての記述はあるものの、知識が乏しく、たとえば、ロゼッタストーンの解説の事実には承知していなかったようである。

久米は英国の例を挙げて国の盛衰を左右するのは、第一に精神力、経済力・技術力は二の次、という趣旨のことを述べているが、これは後者の諸力も同様に重要と考えるべきと思う。(文責) 永島 脩一郎



セイロンのホテル(「写真・絵図で甦る 堂々たる日本人」)

■第百十七回

十月十七日開催。出席者七名。Chapter 96 (阿刺伯海航程ノ記)

七項目のNotesの和訳、英訳者がNotesに引用している。The Oxford Survey of the British Empire” by Herbertson and Howarthの該当部分の

使節団は米欧回覧の帰途、スエズ運河、紅海を経て一八七三年八月一日アデンに寄港、アジアでの第一歩を印した。アデンでは貯水池の見学などしているが、久米は第七十三巻(イタリヤ国ノ略説)でも引用した「沃土ノ民ハ情ナリト」をここでも引用しており、この地域はイタリヤより更に貧しいことを痛感している。

英訳実記の最大のメリットの一つは、久米のあやふやな方角やカタカナの人名・地名を現地検証により正確なスペリングで記述していることであるが、この巻の八月二日の項で久米が「アデン湾」とするべきところを「阿刺伯湾」とし、英訳者がこれに輪をかけて「ペルシヤ湾」と訳しているのは、大変珍しい間違いであろう。この他にこの巻では三か所の英訳の疑問点を指摘した。

■第百十八回

十一月二十日開催。Ch. 97 A Record of The Island of Ceylon p.p.297-311

現在のセイロン(スリランカ)は人口約二千七十万、面積約六万六千km²であるが、使節団が訪れた頃は、人口約二百四十一万人、面積は今と変わらず約六万六千km²を支配領域としていた。

スリランカは、我々に今でもそれほどよく知られていない。そこで、平凡社の世界大百科事典のスリランカの項をコピーして参加者に配布した。それによると、使節団が

訪れた頃はイギリスの植民地で、プランテーション農業生産様式が成立しており、コーヒーの栽培が盛んに行なわれていた。紅茶の栽培が盛んになるのは、一八八〇年代以降である。

関西支部報告 担当幹事 難波 康熙 namba@jttk.zaq.ne.jp

■第六十八回

八月二十四日開催、出席者九名。第二編第三十五巻ブラットホルト府の記。

ブラットフォード(ブラットホルト)はイングランド北部のヨーク

て二束三文で仕入れた屑繭から、付加価値の高いピロードや絹毛氈を生産しているプロセスをつぶさに見学した使節団は、感心している。同時に、少し複雑な思いを抱いたようである。

ここブラットフォードでも、地方政府からの歓迎だけでなく一般民衆からも異常なまでの関心を持って見物された。この背景として、前回の報告でも述べたように英国産業が米独の追い上げを受けて極東にも市場を求めていたこと、今回の会合では英国の対中国関係やイメー

■第六十九回

十月十二日開催、出席者七名。第二編第三十六巻舌非力(シェフィールド)府の記。

サウス・ヨークシャ随一で全英八位の人口二十四万(当時)を擁するシェフィールドは、鉄鋼の生産で有名であった。主として大型の鋼材、鉄道レールはもとより装甲板圧延、砲身、蒸気機関のシャフトなど付加価値の高い製品を生産する。これは一八五〇年代に開発された鉄鋼生産方式で、生産効率に優れている「ベッセマー製鋼法」がシェ

フィールドに導入されたことに負うところが大きい。使節団はその製造現場を悉く見学する。その描写には熱と音を感じさせる臨場感がある。ベッセマー転炉に溶解した鉄鉄を入れて含まれている余分な炭素やケイ素を転炉の中で取り除くという方式である。

使節団が見た英国の製鋼業は、一八六〇年代に開発されたベッセマー製鋼法や熱量の高いコークスの利用などにより技術的な優位に立っていた。しかし、欧州産の鉄鋼石がリンや硫黄など不純物を含むことから、アメリカなどの高品位鉱石に対して原料面で相対的に不利となりつつあった。また、ドイツの石炭ガスを利用した高温溶融での脱炭素精錬による鉄鋼生産などで、英国は鉄鋼生産における技術の優位性も失ってゆきつつあった。

岩倉使節団から三十年余後に英国で建造されたタイタニック号の沈没事件の原因も、鉄鋼の不純物の硫化マンガンを多量に含んだ船体鋼板や特に多くのリベットが、氷山を擦るよう接触した時に、本来の強度不足に加えて低温で脆さを増していたため、一気にそれらが破損、破断したことに起因するとも言われている。

(文責) 難波 康熙

特定非営利活動法人
「米欧亜回覧の会」ご案内

- 趣旨** この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この歴史的な大いなる旅と「実記」は、まさに「温故知新」の宝庫といえましょう。
この素材を媒体に歴史を学び、現代の直面する諸問題についても自由に語り合う会です。
- 会員** 趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。
- 例会** 年に4回、全体例会があります。
- 部会** テーマ別に読む会、歴史部会、グローバルジャパン研究会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。
- 機関紙** 年に4回、機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。
- 役員** 理事長(泉三郎)他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。
- 会費** 年会費6,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、仮入会希望者、学生には地方会員、準会員、学生会員の制度もあります。
- 事務局** 「米欧亜回覧の会」
〒135-0021
東京都江東区白河 4-9-14-1407
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL:090-4723-9705 FAX:03-3641-9407

入会申込

入会申込書はホームページと事務局にあります。新規入会に際しては入会金5,000円を頂きます。
なお年会費などのお支払いは下記のゆうちょ銀行口座への払込(振込)をご利用ください。

00180-2-580729 特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

ホームページ

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ等
また、書籍・DVD案内もあります

<http://www.iwakura-mission.jp>

*お知らせ欄も時々チェックしてください



<催し案内>

2014年1月～3月の予定です

☆新年懇親例会

日時：平成26年1月5日(日) 12:00～14:00
テーマ：音楽で巡る岩倉使節の旅
場所：日本外国特派員協会(外国人記者クラブ)
JR有楽町駅日比谷口、電気ビル北館20階
会費：7,000円(ご同伴5,000円)

☆実記を読む会

日程：1月9日(木) 泉氏「久米の名語録-2」
2月13日(木) 堀江氏「第42、43巻」
3月13日(木) 小野氏「第61～65巻」
時間：14:00～
場所：国際文化会館401号室(会費：1,000円)

☆英訳実記を読む会

日時：1月22日(木) 14:00～ 担当：大森氏
2月19日(水) 14:00～ 担当：樫原氏
場所：銀座ルノアール・マイスペースニュー
新宿3丁目店2号会議室

☆グローバルジャパン研究会

日程：2月8日(土)「財政と税制を考える」
(山田哲司氏)
3月8日(土)「魅力あるJAPANを創る」
(西川武彦氏)
時間：13:30～16:30
場所：国際文化会館403号室(会費：1,000円)

☆歴史部会

日程：2月17日(月)「榎本武揚」(岩崎洋三氏)
3月17日(月)「徳富蘇峰」(吹田尚一氏)
*13:30～17:00
4月21日(月)「明治14年の政変」
(大久保啓次郎氏)

時間：18:00～21:00
場所：国際文化会館E(会費：1,000円)

☆関西支部例会

日時：2月8日(土) 12:30集合～16:30
場所：大阪弥生会館
会費：1,500円+昼食代1,000円くらい

編集後記

◇今年度に会員となった新会員四名の方の自己紹介文を掲載(三頁)することができました。前号の五名を加えると九名(女性五名、男性四名)となり、続いてきた会員減傾向にようやく歯止めがかかる兆しが見えてきたよう気がします。今後も多様な層の会員が増え、当会の活性化の一翼を担っていただくことを期待します。

◇第七十一号(六月)、第七十二号(九月)では、部会報告欄が従来の六・七頁に収容できない報告原稿量となっていました。今号は三頁下段から八頁までが部会報告となりました。量ばかりでなく内容も、興味深いテーマで定例開催されるようになったグローバル・ジャパン研究会と歴史部会の報告、そして、英訳実記を含む読む会や関西支部の充実した報告が続きます。このような部会活動の活発化が、新会員増の要因の一つではないでしょうか。

◇担当の方にお書き頂いた報告文を紙面に合わせるためカットせざるを得ない場合も多くなることをお詫びいたします。また、橋本吉信氏から頂いたたくさんの写真も一部しか掲載できませんでした。